

■ 8. 大学図書館の学習支援

同志社大学 学習支援・教育開発センター

井上真琴

1. 教育から学習支援へ

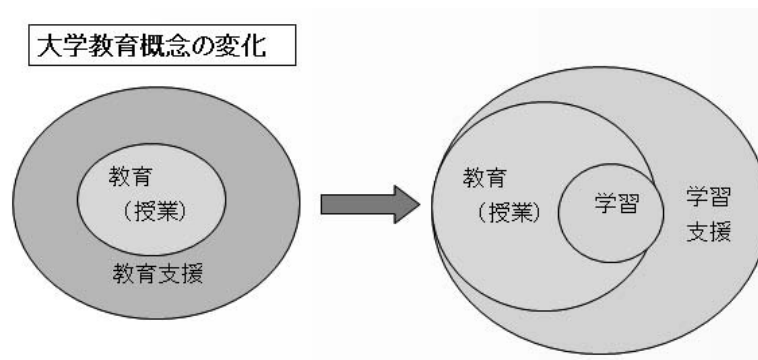
1.1 なぜ学習支援に参画するのか

現在、日本の高等教育は「教育」から「学習支援」へとそのコンセプトを移しつつある。

インターネットの隆盛に象徴される高度情報化社会・知識基盤社会においては、伝統的な授業形式である「知識の伝授」よりも、学習者が自らの創造性を開発するよう誘導する学習支援に焦点が当てられるようになってきた。

大学行政管理学会初代会長を務めた孫福弘氏は既に17年前、2010年の高等教育界を予測して、「教育すなわち学習の主役は学習者としての学生であり、教室での授業の役割は、主として学習者の問題意識の喚起と指導助言機能、ならびに必要なに応じた知的技法の付与におかれ、学習活動の中心部分は、キャンパスや街などの空間で学習者の主体的行為として営まれる」と論じている。

さらに「教員による良質の授業と同時に（中略）、学習者の主体的学習を効果的に支援する、組織化され制度化されたさまざまな仕組み、仕掛けがなくてはならないものになる。そしてこの過程では、従来の教育（授業）機能のある部分は、学習支援の装置の役割に移管されることになる」と喝破していたのである（下図参照）。



『大学改革 2010年への戦略』p.138より転載

ここでは、学習を促すものとして「教育（＝授業）」と「学習支援」の機能が、対等な重要性をもって「学習」機能を取り囲むという構図が成り立つ。学習者の創造性を開発する教育では、「授業」も一種の学習支援に過ぎない。この認識構造が学習支援を考えるうえで重要な鍵となる。大学職員が、そして大学図書館員が、学習支援に身を投ずる根拠はこの点にあるとよい。

何より、学生の学習こそが最優先の課題であり、教員は授業（＝学習支援の材料）の提供、職員は学習支援サービスの提供を通じて、互いに学習を支援する重要なパートナーの機能を共有し、協働することが求められるのである。

1.2 新しい教育手法への注目

教育コンセプトの変容の背景には、高等教育のグローバル化の波が横たわっていることを忘れてはならない。日本の高等教育も国際競争力に晒され、昨今では教育プログラムや卒業時能力の国際通用性をめぐって、「教育の質保証」が声高に叫ばれている。

グローバル化社会では、「何を教えたか、何を伝えたか」よりも、学生自身が教育プログラムを通じて「何を学び、何ができるようになったか」が問われる。つまり、学習成果：Learning Outcomes の重視である。それには新しい教育手法の開発と導入が不可避となってくる。

また質保証に関連して、「単位の実質化」に向けていかに学生の「質の高い授業外学習」を担保するかも、最大級の課題と認識されている。こうした課題群への対応は、教育手法の高度化と学習支援の仕掛けがなくては全く語りえないと言えよう。

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」（2008.3）においては、「学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法を重視し、例えば、学生参加型授業、協調・協同学習、課題解決・探求学習などを取り入れる」ことが提言されており、教育が「知識の伝達」から「知識の創出・自主的学習」へと向かう潮流は明白である。

さらに、同審議会・大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」（2012.3）、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（2013.8.8）では、授業外学習を含む学修時間の質的転換と主体的な学びの支援が強調されている。

とはいえ、主体的・能動的な学びを引き出す教育手法は容易に普及するものではない。

アクティブ・ラーニング、PBL（Project/Problem Based Learning）、TBL（Team Based Learning）といった教育手法を実践するには、授業の設計・運営・評価の面で教員側にも相当な力量と負担を強いることになり、教育プログラムの運営に携わる大学職員・大学図書館員の支援能力や教学マネジメントの力量も問われることになる。

大学教員の教育力の組織的向上を目指す FD（Faculty Development）の研修プログラムでは、この種の授業を実践するための職能開発コースが準備されている。内容は授業外学習を誘発する指導法、学生への課題の与え方、学生に「勉強させる」方法論が中心となっているが、これらは大学図書館の支援なしには実効性を持たないであろう。いまこそ大学図書館が教育改善や学習改善に貢献できること、学習支援で可能なことを積極的に主張すべき時であり、私たちはまたとない好機を迎えているのである。

1.3 学習支援サービスに向けて大学図書館員が学ぶべきこと

大学図書館はこの潮流に乗り、大胆な組織の再編と新しい学習支援サービス機能の開発を急がねばならない。現場からは学習支援サービスは既に十分実施しているとの反論があるかもしれないが、従来の情報リテラシー教育であれば、ガイダンス・講習会の実施、パスファインダー作成等に留まり、教員の授業補助にすぎないものが多く、学習支援の主役に躍り出るものではない。

大学図書館員は自学の教育内容やカリキュラムを分析することにより、従来の授業補助的サービスではなく、学習者の学習プロセス全般に亘って直接アドバイスを行い、教室内外の学習支援

を強化するサービス体制を確立することを目標としなければならないのである。

目標を達成するには、大学図書館員も教員と同様に「人はどう学ぶのか」という学習のメカニズムに関する知識や理論を体得しなければならない。というのも、欧米ではFD推進現場から教育力改善（＝学習支援力改善）には「図書館員を巻き込むべき」との意見が頻繁に発せられ、大学図書館界が唱導してきたラーニング・コモンズについても、FD関係者、高等教育研究者から熱い視線が注がれている。こうした期待に応え、大学図書館が情報リテラシー教育を主軸とする学習支援サービスを展開するためには、学習科学に基づいた教授法のノウハウを取り入れ、主体的な学びを促す教育手法を使えることが教員同様に必要であり、そのことが教員と協働する際の「共通言語」となるからである。

科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」（2010.12）が指摘する通り、学習支援を担当する図書館員は、大学図書館員としての専門性に加え、「学習支援における専門性」「教育への関与における専門性」が求められる。実のところ、それを体現しているのが欧米の Blended Librarian や Embedded Librarian なのである。

2. 学習支援とラーニング・コモンズ

2.1 学びを誘発する“仕掛け”空間

大学図書館界に膾炙した観のあるラーニング・コモンズは、「知識が伝えられるだけの場」ではなく、学習者間の啓発、物理的な空間や教育ツール（用具）の相互作用を通じて、「知識を再構成し創造する場」を大学図書館が関連部局と協力して運営することを狙いとする。ラーニング・コモンズは、何かを学ぶだけでなく、目標に到達するにはどのように学べばよいかを（他者と協調して）学ぶ場、学習プロセスのマネジメントを含む「メタレベルの学び」「学びの身体技法」を獲得する学習環境にほかならない。その仕掛けができて初めて、先に触れた「授業外学習（学修）の質的転換」を担保する空間というスキームに繋げていくことができる。

さてここで留意すべきは、欧米のラーニング・コモンズは、実践の共同体理論、学習の状況論的アプローチ等のコンセプトが表現されている空間であるということである。

ラーニング・コモンズの空間に一歩足を踏み入れると、グループワークを行う学生の様子が見て取れる。グループ学習室はガラス張りが多いが、透明でオープンな空間の利点は何か。それは学び方が「見える化」され、相互に触発される仕組みになっていることである。あるグループはコンセプトマップを白板に書いて、解決に向けて議論を行っている。他のグループは、ブレイン・ストーミング作業でひとつずつ問題を付箋紙に書きあげ、机の上に並べて分類作業をしている。またあるグループは、グラフかマトリクスを電子黒板のディスプレイに映し出し、画面に書き込みを入れながら相談している。別の場所では、学生対象のワークショップが開催中で、通りがかりの学生が興味をもって何をしているのかと話に引き寄せられていく。

あたかも創造現場の実況中継のように、学生やグループの活動が、リサーチの方法や作業プロセスが、相互に「見える化」されていることで、学生同士、教員と学生との双方向の反応が共有できれば連鎖の効果は大きい。決定的なのは、視認性と相互刺激性の高さによって、この空間に

「思考過程の可視化と共有」が生まれていることなのである。

この空間はまた、情報リテラシーを育む空間でもある。授業で紹介される参考ツールやデータベースという「道具」はすぐに使いこなせるものではない。レポートの執筆やゼミ発表の準備を行うプロセスのなかで情報探索を行ってこそ、使いこなす実践知が得られる。リサーチの現場でしか、プロセスの渦中でしか学べない知識がある。講義で教えられる学術知や専門知は、図書館によるチュータリングの人的支援（レファレンスや情報リテラシー教育）を受けながら、具体的な学びの文脈のなかで実践知に変換されるはずである。

これに対し、日本国内で先行してラーニング・コモンズを開設した大学の中には、教育と学習環境に関する認識不足により、運営の停滞を招いているところがある。「箱」は作った、だがどのように運営すれば効果的な学習成果が期待できるのか。この検討が後追いになっている大学が多い。学生会館のおしゃべりの場所、飲み食い空間を図書館内に移設しただけで、「コモンズ（集合場所）は存在する。しかしラーニング（学び）はない」との呈をなすところもあろう。ともすれば、デザイン性豊かなデスクを配したグループ学習室、お洒落なカフェの併設等に目を奪われがちであるが、教授法理論や学習科学の裏づけをもって設計・運営されることが望ましい。私たちは早急に、緊張感ある「学びのコミュニティ」を醸成する仕掛けを検討しなければならない地点に立っている。日本のラーニング・コモンズはこれから正念場を迎えるのである。

2.2 運営に求められる力とは何か

ラーニング・コモンズの運営に求められる力とは何か。1.3 の再述となるが、特に人的サポートを担当するスタッフは、「人はどのように学ぶのか」の知見を得ることが不可避であろう。英国大学のFD担当者が繰り返し説くのは、「学生の学び方を理解してはじめて、教育方法を議論できる」ということである。つまり学習理論を知れば、どのような課題の出し方をすれば教育効果があがるのか、理解度を増す説明とは何かといった、良い学習成果を導く方法が分かると言う。

実際に私が学びのアトリエ空間と感じたものは、「認知的徒弟制」という学習理論で説明される。事実を学習する学校教育と違って、職人の親方と弟子たちが教え学び合うプロセス、技を盗むプロセスをモデルにした学習理論である。知識という道具を、実際の問題解決の場で使う親方や先輩の「考え方」（認知）を学ぶ点に焦点を当てた理論であり、実感を伴って理解できる。

また、プロの能力は「行為の中の省察」で磨かれると主張する「省察的实践」理論がある。情報リテラシー教育のプログラム開発に、「調べながら考え、考えながら調べる行為」とする視点を持ち込む重要性を教えてくれる。探索のさなかに「振り返り（リフレクション）」の習慣を身につければ、より文脈と状況に適った情報探索スキルの向上に繋がっていく。

単なる物理空間とお仕着せの学習支援サービスがあれば、ラーニング・コモンズが成り立つわけではない。学習支援を図書館が担いたいなら、無自覚な運営に陥りたくないなら、さらに教員と対等に議論したいのなら、学習科学を意識して運営に携わっていく必要がある。

上記を理解した上で、今後最も困難な課題として挙げられるのは、ラーニング・コモンズにおけるチュータリング機能の実現、すなわち人的サポートの組織編制とスタッフ育成のマネジメントであろう。広範囲に亘る学習支援を展開するには、図書館のみで運営をまっとうするのは不可

能である。関連組織（ライティング・センター、ITセンター、FDセンター等）との協力体制を築き、TA（Teaching Assistant）の有効活用や学生同士のピア・サポート活動を仕掛けるマネジメント能力が図書館側に欠如するなら、この種の空間は機能しない。さらに、関係スタッフの能力育成プログラムの開発（例えばTAD：Teaching Assistant Developmentプログラム）や、継続した実施体制の確立という事項も、付随して課題となってくることは間違いない。

3. 学習支援としての情報リテラシー教育

大学図書館での情報リテラシー教育の実践は、例えば初年次教育の隆盛と歩調を合せ、着実に蓄積が重ねられてきた。筑波大学編『今後の「大学像」の在り方に関する調査研究（図書館）報告書：教育と情報の基盤としての図書館』（2007）の詳細な統計をみれば、大学の規模別・性格別に多彩な実施状況を窺え、既に大学図書館における情報リテラシー教育の定着は明らかである。

とはいえ、図書館ガイダンス、データベース検索講習会等のメニューを揃え、とにかく実践を積み重ねている段階に留まっており、学習効果や目標達成評価を測ることや、情報リテラシー教育プログラムの質やデザインを問うまでには至ってはいない。広報を工夫し、参加者を集め、日本図書館協会の「図書館利用教育ガイドライン」を参照しながら試行錯誤を重ね、実績を積み上げている段階はまだ続いているといえよう。

『学術情報基盤の今後の在り方について（報告）』（2006年）による評価は、「現時点で、多くの大学で行われている（図書館の）情報リテラシー教育は教養教育及び各専門分野における教育との連携が不十分であり、効果が限定的である」としている。この指摘の背景には、利用者の学習行動の理解や教員の教育手法との接合に脆弱さがあり、図書館が「個別に」「単発に」開催する“局地戦”としての情報リテラシー教育であるとの認識があるように思えてならない。

では何ができれば“局地戦”からの脱却が可能なのか。それは、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れたプログラム、協調学習を埋め込んだプログラムを図書館員自らが開発し、教員と協働して実践できることであろう。つまり、学術情報がアクティブ・ラーニングに果たす役割を明示的に説明でき、具体的な事例をもって実践プログラムに落とし込む能力を得てはじめて、高等教育世界の“広域戦”に参加が可能になるということである。

3.1 学習傾向の把握と学習プロセス全体に亘る支援

では「組織的に」「計画的に」「体系的に」、かつ教授法や学生の学習方法と密接にリンクした情報リテラシー教育プログラムを実施するにはどうすればよいのだろうか。繰り返しになるが、それには大学図書館員による利用者の学び方、学習傾向の理解と把握がなければならない。

数年前、米国のワシントン大学の研究者が実施した調査報告：Project Information Literacy Progress Report (25大学・8353名の学生を対象にした情報活用に関するアンケート調査と分析)は実に興味深いものであった。この報告によれば、リサーチ活動を展開する上で学生が最も難しいと感じている事項として、1)初動調査を始めること(84%)、2)トピックの明確化(66%)、3)トピックの絞込み(62%)が上位を占めている。

日本でも同様の傾向が見てとれるが、情報源の入手方法というよりは、入手した情報源をじょ

うずに取り扱ってテーマを絞り出し、アウトプットを見据えながらフォーカスを形成していくプロセスに焦点をあてることが重要と言えよう。報告最終章の提言では、情報源紹介に焦点をあてた図書館員研修は再考されるべきであり、むしろ学生のリサーチ戦略の組み立てや、探索時の思考の道筋を指導できる能力を開発すべきだと強調している。

もちろん、彼我の情報環境・教育環境は異なり、そのまま鵜呑みにはできない。しかし私たちも同様に、日本の学生の学習行動を注意深く観察しながら、表面的な学生のデマンドではなく、学習ニーズの文脈を汲み取ったプログラムを考案する必要がある。インターネット情報源が遍在し、利用者が容易に情報源を発見できる環境下では、「情報源の紹介・使い方」から「多様な情報を使ってどのように問題解決を行い、学習成果を出すか」という踏み込んだ情報リテラシー教育へと移行せざるをえない。情報を読み解き、問いを立て、新たな知識を創造する体験を支援する情報リテラシー教育プログラムの実践が求められるのである。

今年にはいり、文部科学省の科学技術・学術審議会学術分科会 学術情報委員会で「学術情報をいかにアクティブ・ラーニングに有効に使うのか」との問いが投げかけられたが、残念なことに図書館情報学の委員は明確な回答を出せていない。学術情報流通の名のもとに、「物流」「ロジスティクス」のみに執心していたツケと言えよう。おそらく、この問いを突き破る情報リテラシー教育プログラムの開発は、上記の「多様な情報を使ってどのように問題設定と問題解決を行い、学習成果を出すか」を、協調学習の手法を交えて実践する視点に立ちえた者だけに開かれているはずである。

3.2 FD 活動との接点を重視する意味

最後に FD 活動との接点も忘れてはならない。NII 主催「学術情報リテラシー教育担当者研修会」の研修プログラムは、教員の FD 研修で説明されている学習理論・教授法を紹介するコマが含まれるカリキュラム編成になり、講師の顔ぶれには FD 推進センターや教育開発センターの教員が並んでいる。ワークショップのコースデザインや実施方法、協調学習の理論やフレームを情報リテラシー教育に応用できるようになるには、従来の図書館の枠を超える領域まで学ばねばならないのである。大学図書館員がアクティブ・ラーニングの手法を自家薬籠中のものとし、実践指導できるようになることこそ、「学習支援における専門性」「教育への関与における専門性」の第一歩になるに違いない。

これまでの大学図書館員の多くは学習科学や教授法に疎く暗い。この状況下で、学習支援の名のもとに情報リテラシーを教えるのは無謀でもある。FD 活動に積極的に参加して、協力体制を築けるマネジメント能力・リエゾン能力を開発し、教員と協働するなかから質の高い情報リテラシー教育プログラムを提示していく努力を続けていかねばならない。情報リテラシー教育の議論は既に、情報源紹介・操作法解説のレベルを脱皮して教育プログラムと連携したアプローチへと離陸する時期に差しかかっている。「知識の蓄積」よりも「知識を使う」能力を重視する高等教育の転換点にあって、各大学においてどのような情報リテラシー教育が有効なのか。それを問うことは、大学図書館にとって永遠の、しかし喫緊の課題なのである。

《参考文献》

- ・孫福弘. “大学運営のリエンジニアリング.” 大学改革 2010 年への戦略. PHP 研究所, 1996, p. 127-153.
- ・中央教育審議会. “学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ)”. 文部科学省. 2008-3-25. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm, (参照 2013-06-08)
- ・中央教育審議会. “学士課程教育の構築に向けて (答申)”. 文部科学省. 2008-12-24. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm, (参照 2013-06-08).
- ・中央教育審議会大学分科会大学教育部会. “予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (審議まとめ)”. 文部科学省. 2012-03-24. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm, (参照 2013-06-08)
- ・中央教育審議会大学分科会大学教育部会. “新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ”. 文部科学省. 2012-08-08. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm, (参照 2013-06-11)
- ・科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会. “大学図書館の整備について (審議のまとめ) : 変革する大学にあって求められる大学図書館像”. 文部科学省. 2010-12-01. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/documents/mext/singi201012.pdf>, (参照 2013-06-011) .
- ・鎌田均. エンベディッド・ライブラリアン : -図書館サービスモデルの米国における動向. カレントアウェアネス. 2012, no.309, p.6-9.
- ・米澤誠. 研究文献レビュー 学習・教育基盤としての図書館動向レビュー. カレントアウェアネス. 2008, no.296, p.26-28.
- ・美馬のゆり, 山内祐平. 「未来の学び」をデザインする : 空間・活動・共同体. 東京大学出版会. 2005, 233p.
- ・山内祐平編. 学びの空間が大学を変える : ラーニングスタジオ/ラーニングcommons/コミュニケーションスペースの展開. ボイックス (株). 2010, 186p.
- ・加藤信哉・小山健司編訳. ラーニング・commons : 大学図書館の新しいかたち. 勁草書房. 2012. 288p.
- ・米澤誠. 動向レビュー インフォメーション・commonsからラーニング・commonsへ: 大学図書館におけるネット世代の学習支援. カレントアウェアネス. 2006, no.289, p.9-12.
- ・McMullen, S. US Academic Libraries : Today's Learning Commons Model. OECD. 2008. <http://www.oecd.org/dataoecd/24/56/40051347.pdf>, (参照 2013-06-11).
- ・特集, ラーニング・commons. 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008, no.7. 70p
- ・井上真琴. 特集, 学習環境としての大学図書館 : 「学びのマネジメント」を支援する. IDE.

- 2009, no.510, p.11-15.
- ・井上真琴. FD 活動との接点から図書館を視る：ラーニング・コモンズを例に. *Maruzen Library News*, 2009, no.7/8, p.12-13
 - ・筑波大学編. 今後の「大学像」の在り方に関する調査研究（図書館）報告書：教育と情報の基盤としての図書館. 2007, p.113-122.
<http://www.kc.tsukuba.ac.jp/div-comm/pdf/future-library.pdf>, (参照 2013-06-11).
 - ・野末俊比古. 研究文献レビュー 情報リテラシー教育：図書館・図書館情報学を取り巻く研究動向. *カレントアウェアネス*. 2009, no.302, p.18-24
 - ・Head, Alison J.; Eisenberg, Michael B. Truth Be Told: How College Students Evaluate and Use Information in the Digital Age. Project Information Literacy Progress Report. University of Washington's Information School, 1 Nov. 2010, 72p.
http://projectinfolit.org/pdfs/PIL_Fall2010_Survey_FullReport1.pdf, (参照 2013-06-11).
 - ・学術情報委員会. 文部科学省.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/031/index.htm, (参照 2013-06-11).
 - ・井上真琴. 特別企画, 新しい学びを支援する大学図書館：大学の教育力を高める図書館の新しい役割. *Between*. 2012, no.6/7, p.26-27.
 - ・井上真琴. ラーニング・コモンズは大学図書館を変える. *私学経営*. 2013, no.460, p.30-36.

大学図書館の学習支援

同志社大学 学習支援・教育開発センター事務長
社会学部嘱託講師「学術情報利用教育論」

井上 真琴

minoue@mail.doshisha.ac.jp

本日のまとめ

1. 高等教育改革とFD推進の文脈のなかで
大学図書館の学習支援を捉える。
※授業改善, 授業外学習の質の保証《教職協働》
2. 「人はどう学ぶのか」=学習理論に立脚した
学習支援プログラムを企画・立案する。
※学習科学・教育学との接点《連携の共通言語》
3. 情報源サービスから「情報を使った学びの
体験」サービスへの転換を理解する。
《アクティブ・ラーニング型情報リテラシー教育》

はじめに

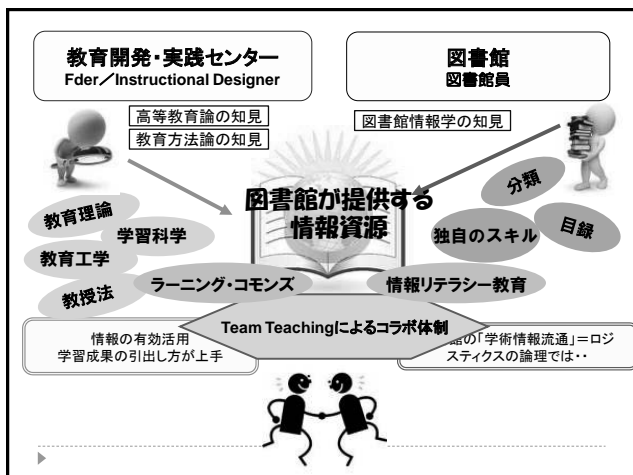
事例:ラーニング・コモンズが必要な理由

- ①高等教育は,学習成果(アウトカムズ)重視に移行
↓シラバス「〇〇ができるようになる」
- ②学習成果を出すのに,アクティブ・ラーニングは有効
↓ラーニング・ピラミッドを見よ!
- ③アクティブ・ラーニングは,基本は複数人数で行う
↓他者という「鏡」を通しバランスをとる
- ④協同学習・協調学習の手法を取り入れたい。
相互支援,相互刺激のなかで,葛藤と調整の経験(社会性・人間力)
↓ピア・ラーニング,ピア・サポート
- ⑤実践・行動を通じて文脈の中で学ぶ学習環境が必要。
↓

前頁からの続き

- ↓
- ⑥正課授業の教室=ラーニング・スタジオ
↓
 - ⑦正課の授業外学習でも同様の学習環境=
ラーニング・コモンズが必要(ラーニング・スタジオと「1対」)
↓
 - ⑧ラーニング・コモンズの利用が増えると
■授業外学習の増大,単位制度の実質化につながる
■リーディング・アサインメント型の課題ではなく,
アクティブ・ラーニングで質の高い学びを覚える
(中教審答申:「学修の質の転換」)

高等教育の質保証の一翼を担う学習環境の整備完了



はじめに

図書館の考える「学習支援」の限界

- ▶教育理論・学習科学が教職協働の共通言語
- ▶図書館での情報リテラシー教育の弱点
=「情報を使って, 学習成果(アウトカムズ)を
出すプロセス全体を指導するサービス」に
なっていない。

- ◎アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた
(学術)情報リテラシー教育プログラムの開発
が焦点

I. 教育から学習支援へ

教育から学習支援へ

教育コンセプトの転換
「知識の伝授」(授業)

Professor = Profess(告白)する人 ×



学習者自らの「創造性開発」(学習支援)
※教育(=授業)と学習支援が対等な関係

高等教育のグローバル化・国際通用性(教育の質保証)
Learning Outcomes重視:「~ができるようになる」

I. 教育から学習支援へ

押えておくべき「答申」類など

- ▶ 2008年3月25日
中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm
(参照2013-07-01)
- ▶ 2008年12月24日
中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm
(参照2013-06-08)
- ▶ 2012年3月24日
中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(審議まとめ)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm
(参照2013-06-08)
- ▶ 2012年8月8日
中央教育審議会大学分科会大学教育部会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
(参照2013-07-01)

I. 教育から学習支援へ

新しい教育手法の推奨

学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法(アクティブ・ラーニング)を重視し、例えば、学生参加型授業、協調・協同学習、課題解決・探求学習、PBL(Problem/Project Based Learning)などを取り入れる。大学の実情に応じ、社会奉仕体験活動、サービ斯拉ーニング、フィールドワーク、インターンシップ、海外体験学習や短期留学等の体験活動を効果的に実施する。学外の体験活動についても、教育の質を確保するよう、大学の責任の下で実施する。

中教審「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」(2008)

I. 教育から学習支援へ

FD活動の活発化と研修内容

FD(ファカルティ・ディベロプメント) =
教員の組織的な教育力向上に向けた持続的な活動

- ▶ わかりやすいシラバスの書き方
- ▶ 授業デザインを学ぶ
- ▶ 授業アンケートのフィードバック方法
- ▶ クリッカーを利用した効果的な授業実践
- ▶ PBL, TBLの授業(ファシリテーション)方法
- ▶ 学生のやる気をださせる話し方講座
- ▶ よい学習行動を導く「課題の与え方」

I. 教育から学習支援へ

狙いは、学生の「学びの質向上」

もしも・・・
大学の最終的な目的=学生の「学びの質向上」

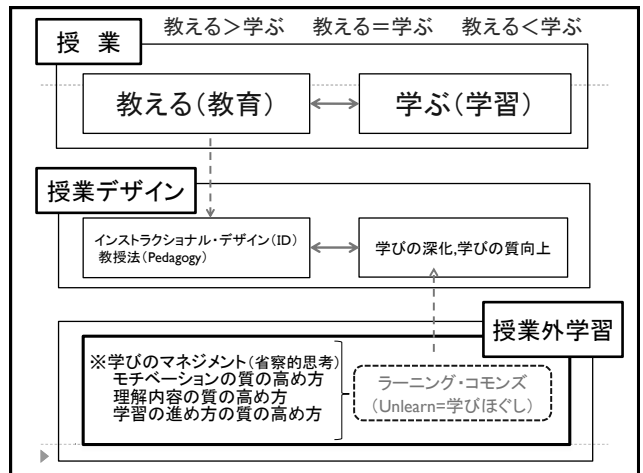
FDの目的=教員が変わる⇒ 学生の学びの質向上

間接的関与

FDの目的=学生の学びの質向上⇒ 教員が変わる
【授業至上主義との訣別】

直接的関与

島根大学・森朋子氏作成スライド「学習研究を基盤とした協働型FD」
(名古屋大学招聘セミナー, 2012.10.17)を参照



I. 教育から学習支援へ

- ◎科学技術・学術審議会 学術分科会
 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会
 「大学図書館の整備について」(審議のまとめ)
 -変革する大学にあって求められる大学図書館像-
 2010年12月3日
1. 大学図書館の機能・役割及び戦略的な位置付け
 (3)大学図書館に求められる機能・役割
 ①学習支援及び教育活動への直接の関与
 2. 大学図書館職員の育成・確保
 (2)大学図書館員に求められる資質・能力等
 ①大学図書館職員としての専門性
 ②学習支援における専門性
 ③教育への関与における専門性
 ④研究支援における専門性

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm
 (参照2013-07-01)

II. ラーニング・コモنزの機能と役割

課題:授業外学習の質を担保できる
 学習空間・学習環境の提供



- 話題の《ラーニング・コモنز》
- ・創発を準備する学習環境
 - ・学習の文脈に応じた人的支援

II. ラーニング・コモنزの機能と役割

高等教育界からの注目



- ◆天野郁夫「考えさせられることの多い特集であった」
 (『内外教育』No.5933)
- ◆井下 理「教授法改善と学習支援型図書館」
 「国際水準での大学の学習環境整備」
 (『教育学術新聞』2010.1.3)

○高等教育の改善、質保証の視点で注目を浴びている

- ×入館者減少の食い止め策
- ×空いた場所の有効活用

No.510

学習環境としての大学図書館

2009年5月号

II. ラーニング・コモنزの機能と役割

同志社大学ラーニング・コモنز



同志社中学校移転後の用地に、教室、研究室、学生の自習室や福利厚生施設、人文・社会系学生を対象にしたラーニング・コモنز等を備えた新校舎「良心館」(地下2階、地上5階、建築面積約8,000㎡、延床面積約40,000㎡)を建設した。

II. ラーニング・コモنزの機能と役割

空間のコンセプト

- ▶ 面積 2,550㎡ (日本最大級)
- ▶ 図書館とは別校舎: 教室棟 (40,000㎡)
- ▶ 「知的欲望開発空間」が全体コンセプト
- ▶ 目標は主体的な学びの進展、授業外学習の「質」の転換
- ▶ 2フロアで構成 (各フロアコンセプトの共鳴)
 2F: クリエイティブ・コモنز: 学びの交流・啓発空間
 「学びのコミュニティ」の創出
- ▶ 3F: リサーチ・コモنز: アカデミックスキル育成空間
 チュータリング機能 (学内初の学習支援組織)
- ▶ 運営主体は学習支援・教育開発センター
 関係部署間の連携軸 (図書館、学生支援センター、キャリアセンター、国際センターほか)

II. ラーニング・コモنزの機能と役割

空間が備える性格

- ▶ 柔軟性 (Flexibility):
 可変性のある空間、組合わせの型の机、持ち運び可能なホワイトボードほか
- ▶ 快適性 (Comfort):
 長時間滞在が可能な休憩ラウンジ
- ▶ 感覚刺激性 (Sensory Stimulation):
 オープンスペース、他者の学習行動が「情報」になる空間
 認知的徒弟制、正統的周辺参加: 学習科学の理論体現
 「開かれた倉庫」の創出: アフォーダンスの効かせ方
- ▶ 技術支援 (Technology & Skill Support):
 PCサポート、学習スキルサポート、情報探索サポートほか
 ワークショップ開催ほか プレFDに結び付ける

II. ラーニング・commonsの機能と役割

学習支援のための人的支援の配置

- ▶ アカデミック・インストラクター(専属教員2名)
- ▶ ライティング・インストラクター(専属職員1名)
- ▶ 学習支援コーディネーター(職員1名)
- ▶ ラーニング・アシスタント(大学院生数名)
- ▶ 情報探索アシスタント(図書館から1名)
- ▶ 留学コーディネーター(国際センターから1名)
- ▶ 留学アシスタント(国際センターからの数名)
- ▶ ICTサポートスタッフ(ITサポートオフィスから数名)
- ▶ プリントステーション・スタッフ(業務委託2名)

※学習支援・教育開発センターに担当部会を設置して統括

II. ラーニング・commonsの機能と役割

Beagleのcommonsの四段階

第1段階: 適応としてのIC

情報通信技術の適応だけしている状況

第2段階: 孤立した変化としてのIC

第1段階が進化して、リソースの発見からデータ処理、プレゼンテーションや出版の段階までサポートするようになったもの

第3段階: 広範囲に及ぶ変化としてのLC

FDセンター・教授学習センターとの連携、図書館の電子リソース統合、CMS統合、バーチャル・レファレンス実施
※図書館中心ではなく、教育に関する機能に統合・協同

第4段階: 転換的な変化としてのLC

全学的な体制として位置づけられ、教育のイノベーション(カリキュラム見直し、横断型のプロジェクト)を伴う

山内祐平, “大学の学習空間をデザインする”, 『学び』の認知科学事典, 大修館書店, 2010, p. 239-249

III. 学習支援としての情報リテラシー教育

課題: 情報リテラシー教育を
学習支援の視点から捉える

○コンピュータ利用, 情報探索・情報検索に関わるスキル

情報を入手するには, 入手するためのツール(道具)をよく知り, その使い方を学ぶことである。



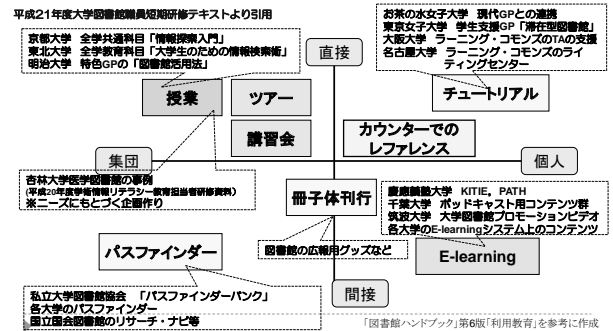
○ツールスキルから情報利用のメタ・スキルへ

上記に加え, 入手した情報・資料の可用性を検討したり, 批判的に読み解き分析して, 具体的な知的成果物を創造するプロセス全体に亘るもの(=問題解決能力)をプログラム化

III. 学習支援としての情報リテラシー教育

学術情報リテラシー教育のいろいろ

■ 現在の大学における情報リテラシー: 代表的な実践例



III. 学習支援としての情報リテラシー教育

情報リテラシーの定義

情報リテラシーを持っている人は, つまるところ, 学習の方法を知っている人である。学習の方法を知っているのは, 情報がどのように構造化されているか, 情報をどのように見つけるか, どのように利用すれば他人が自分の成果を摂取して学んでくれるかを知っている。

また, どのような作業や判断においても必要な情報を見つけることができるので, 生涯を通じて学んでいく。

ALA, Presidential Committee on Information Literacy, Final Report (1989)

III. 学習支援としての情報リテラシー教育

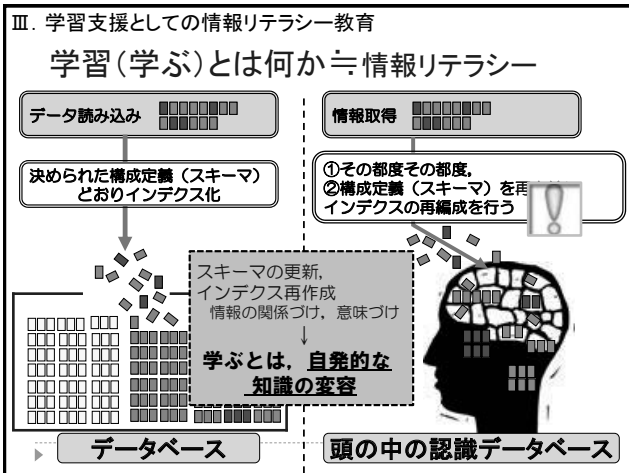
学習(学ぶ)とは何か

- ▶ 日々得る情報(モノからヒトから)を批判的に摂取し, 新しい知識を創るために, 頭の中の思考のスキーマ, インデックスを更新し, 知識を再定義・再構成するプロセスそのもの。



Fabulous!!

エルゼビアサイエンス ライブラリ・コネクトセミナー
「情報リテラシー教育」(2009. 12, 大阪会場)



Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

アクティブ・ラーニングの手法を 情報リテラシー教育に取り込めるか

2000年～2005年頃のALAの議論
情報リテラシー教育をアクティブ・ラーニングで
展開できるかどうか。

何が必要なのか？

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

学術情報とアクティブ・ラーニングの関係

▶ 学術情報委員会(科学技術・学術審議会, 学術分科会)
「学術情報がアクティブ・ラーニングに果たす役割を
明確にしてほしい」

従来:モノ(情報)があって,配信する【モノ重視】
学術情報流通:ロジスティックスの視点で語りすぎた
きらいあり(インフラ面に偏重)
今後:行動があって,モノ(情報)で人の「認知」を変える
【コト重視】

▶ Walkman と iPodのアナロジー

- ・モノ(音楽)があって,提供する【モノ重視】 配信側の視点
- ・行動があって,それにモノ(音楽)を適用させる【コト重視】
※具体的な行動の仕方,使い方の情景を浮かべて企画

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

欧米と日本の学習支援スタッフの違い

学習支援に必要な能力

1. 支援するひとが, インストラクショナル・デザインや学習環境理論を知っている。
2. 教授法・教育手法をはじめ, 学習科学＝
「人はどう学ぶのか」を学んでいる。

上記のことに基づいた企画, 設計, 運営

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

Blended Librarian, Embedded Librarianに学ぶ

▶ Blended Librarian :
図書館スキルをIT技術, 授業設計技術, 教育学等と結びつ
けて大学の教育現場で活躍する図書館員
The Blended Librarian.
<http://crln.acrl.org/content/65/7/372.full.pdf> (参照 2013-07-01)

▶ Embedded Librarian:
図書館を離れ, 利用者が活動している場から, 利用者と活動を
ともにつつ情報サービスを提供している図書館員。
ワークショップのような実践的な情報リテラシー教育が実行でき,
情報の特徴や信頼性を批判的に評価することを, 学生のリサー
チプロセスの全領域に関わって指導する。
鎌田均, エンベディッド・ライブラリアン:図書館サービスモデルの米国における
動向. カレントアウェアネス. 2011, no.309, p6-9.

参考までに

学習科学・学習理論を理解するために

連載 5分でわかる学習理論講座(全11回). Beating(メール
マガジン). 2005, no.11 - 2006, no.22.
<http://www.beatiii.jp/beating/index.html> (参照 2013-07-01)
※連載内で紹介されている文献すべて

中原淳, 金共壽宏. リフレクティブ・マネー
ジャー:一流
は常に内省する. 光文社. 2009, 347p .